

拙堂會報

第16号

2024年6月1日発行

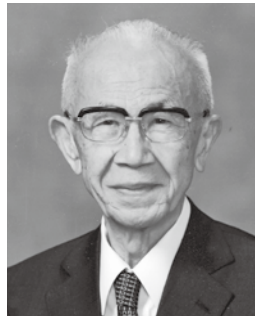
発行所
齋藤拙堂顕彰会

理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

二百年前でもよみがえる嵐山の櫻花		出展を終えて	
拙堂地震の詩	齋藤正和 1	第八回齋藤拙堂顕彰吟道大会開催	小島ゆかり 9
藩校	加藤龍宗 2	俳句朗詠を終えて	石野真風 10
第八回齋藤拙堂顕彰俳句・短歌	飯田俊司 3	拙堂顕彰会受賞の喜び	11
第七回齋藤拙堂顕彰小中学生書道展	伊東祐相について 寺島栄一 13	令和六年度拙堂会総会報告	13

二百年前でもよみがえる嵐山の櫻花

顧問 齋藤正和



齋藤拙堂（一七九七～一八五四）は名文家といわれる。しかし、文士ではない。藤堂藩に仕える傍ら文学を究めようとしたのだ。韓愈（七六七～八二四）や蘇軾（一〇三六～一一〇一）を夢見たのだ。彼は漢詩においても優れており生涯に一千首以上の詩を遺している。それは折に触れあたたかも日記のようであり『鉄研齋詩存』

という刊本になっている。故杉野茂先生は、中でも『齋藤拙堂詩選』で選りすぐりの二百首を選んで釈読されている。

例えば、「晚自嵐山還 宿天龍寺」では、「迷花不覺到黄昏」から始まる詩がある。花とは、桜であり、時を忘れるほどに飲んで、見とれて、とうとう黄昏時になった。お堂にお参りするも、嵐山から帯びた桜の香りでご無礼いたす…。という意味のことが、洒脱で明解な七言絶句で書いている。桜の季節にこの詩がさらさらと読めたら、さぞ風流であろう。

漢詩は元より、一般庶民の慰みでは無い。大衆的には、一茶や蕪村の俳句が好まれるのは承知のうえだ。漢詩には、かっちりとした約束事

があり、それを踏まえた知的なゲーム感覚を要する。博物館に行っても自分の知っている範囲内で文字を見るようになるから面白い。「自」という字は、たいいてい「から、より from」とするとそこだけは分かる。その手探り感がいなのだ。拙堂の一番好きだった蘇軾は七六一年前の人だ。学んだからこそ、時空を超えて蘇軾と心の中で対話出来たのだと思う。我々にとつて拙堂は、たかだか二二七年前の人物だ。その人の人となりを知るのにどうするか。詩がある文がある。

拙堂は、自分の肉体は滅ぶとも文は残る。しかし、文化が浸食されたらそれは手強いと予言もしている。今が、我々にとっての分水嶺だ。戦後日本の強さを文学の中にあると考えたからこそ、我々は、明治以前の高度な文学に対するアクセスを遮断されてきた。一人でも良い。共にそのことに気付いた人達が、真の学ぶことの楽しさと喜びに気付いてくれたら。

私は、「齋藤拙堂」という伝記を書いた。しかし、拙堂が直接著した漢詩、漢文に諸兄が直接

触れた方が、より拙堂の武士としての心情や佇まいに触れられると思う。それに、万巻の書を読みこなした拙堂の詩文は本国中台でも十分通用する。私も、残り約八百首を少しづつでも訳

拙堂地震の詩

会長 加藤 龍宗



八十歳に祈り捧げむ熱きとき

南の海にねむるみ魂に

令和六年も早や半年が過ぎた。今年も熱い鎮魂の夏を迎える、敗戦から七十九年、戦争孤児である小生にとっては八十回目の祈りの夏である。先の大戦にて太平洋の南の島々に散った幾万の尊い生命、犠牲となられた各々の

していきたい。
選ばれた顕彰会の皆様方が少しでも心に留めてくださると有り難いです。感謝。

国の人々、正に「人類の敵」である戦争の悪夢は生涯消えることはない。今日の平和の礎となった全ての尊いみ魂への祈りを、全ての人々と共に捧げたい。さて今年は能登半島大地震により始まった、尊い生命を奪われた方々の魂安からんことを祈り、一日も早い復興を祈念申し上げたい、我国は地震大国であることは今更申し上げることはないが充分に備えなければならぬ。では拙堂の時代はどうであつたらうか、一八〇四年出羽地方、一八二八年越後地方、一八三〇年京畿地方、一八五三年関東地方と大きな地震があつた。そして拙堂は二度地震と遭遇している。一八五四年神奈川静岡地震が発生、死者一万人以上であつたと記されている。翌十一月五日には伊勢湾一帯に大地震があり、倒壊家屋一万户以上、東海道の交通が途絶したとある。拙堂は茶間山荘にてこの地震に遭いその時の詩「新築事を書く」を残している。二度目は翌年將軍家定に拝謁するため江戸に出府したときのことであつた（八月十五日に拝謁）、十月二日安政の大地震が発生、江戸城諸大名屋敷、民家社寺等倒壊一万四千戸、死者七千人に及んだ

とされている。我等吟詠家にとって忘れる事の出来ない藤田東湖が圧死したときのことであつた。拙堂は子息誠軒に助け出され九死に一生を得たとのことであつた。その時の詩（七言古詩三十一連）「地震行」には「一朝驚き覺む繁華の夢、豈に担地裂け天墜つるを恐るのみならんや」とその時の恐ろしさを詠っている、では茶間山荘での詩を紹介しておこう。

「新築事を書く」五言古詩二十四連詩内十二詩。会員各位に暑中の御見舞と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



新築事を書す 齋藤拙堂

仰 あお ぎ 看 み れば	四 し 隣 りん	久 ひさ しく 悟 さと る	地 ち 動 うご くも	吟 ぎん 誦 しやう して	我 わ れ 独 ひとり り	呼 こ 号 ごう	僮 どう 僕 ぼく	搖 よう 々 よう として	時 とき 有 あ りて	余 よ 動 どう	只 ただ 是 これ
月 つき 下 か	人 ひと 漸 ことごと く	浮 うき 世 よ の	心 こころ 動 うご かず	口 くち 伊 い 憂 ゆう たり	悟 ご に 抛 な りて	声 こゑ 喧 けん 嗽 しゅ	奔 はし りて 逃 とう 避 ひ し	舟 ふね に 坐 ざ するが	牀 しょう 榻 とう を 憾 うご かし	猶 なほ 未 いま だ 休 やす まず	歳 とし 已 すで に 改 あらた まり
鉤 こう	寂 しず まり	身 み			坐 ざ し			如 ごと し			

いま新しい年を迎え
余震もまだおさまることはない。
時々ベッドをゆらし
ゆらゆらとして舟に坐っているようだ。
下男たちは走って逃げまどい
よびあう声はやかしいことだ。
私はひとり机のそばに坐り
詩を考えて口ごもっている。
地は動いても心は動かず
改めて悟ったよ浮世のはかなさを。
あたり人ようやく静まり
仰いでみれば片われ月がかかっていた。

藩 校

理事長 飯田 俊司



日本は度重なる大地震の発生、新型コロナウイルスの蔓延、地政学的な安全保障環境の悪化など、国民の安全が脅かされる事態が続いています。

このような状況は幕末〜明治維新の頃の日本と比較されますが、幕末期は安政地震、コレラ、天然痘など疫病の蔓延、天明、天保の飢饉、さらには徳川幕府崩壊、鎖国政策の終焉など、はるかに困難な事態でした。

しかし、明治維新を成し遂げた日本はこのような事態を見事克服し、短期間で世界の列強に匹敵するまでに発展をしました。

その大きな理由の一つに日本の教育水準の高さが挙げられます。幕末期の日本人の識字率の高さは正確な統計はないものの、七〇〜九〇％と世界でもトップクラスだったという説もあり

ます。武士の識字率はほぼ一〇〇%でした。徳川政権の安定による武断政治から文治政治への転換に伴い、宝暦紀（一七五一〜一七六四年）以降多くの藩が藩政改革のため、有能な藩士を育成する目的で藩校を設立しました。

発展期には全国で二百数十校が設立されたと言われます。幕末当時は水戸の弘道館、萩の明倫館、会津の日新館など活発に活動した藩の藩校が著名でありました。

三重県内では長島藩が一七八五年に文礼館、一七九十年に亀山藩に明倫舎が設立され、津藩の有造館の設立は少し遅れて、千八百二十年、県内各藩合計十三の藩校が設立されました。有

造館は江戸時代後期に全国で三百以上ある藩の中でも文藩（教育・学問に優れた藩）と呼ばれ、学問に熱心な藩校として知られました。創設者の藤堂高兎が優れた学者を集め、充実した教育環境を整備したことによりです。有造館の教育内容は①「文武忠孝」を教育方針の核とし、偽りのない有能な人材育成。②外国からの圧力が高まる中、洋学館を創設し、蘭学者を招聘して、医学や化学を学ばせるなど西洋の知識の吸収に積極的な取組。③出版事業を積極的に進め、多くの「有造館版」書物を出版。④加えて拙堂の著作と教育。

特に第三代有造館督学の拙堂は教育者、漢学

者としての素養を基礎に新しい教育方針を藩校に取り入れるなど藩校教育の充実と人材育成に尽力しました。また経世家として時世の変遷に対応、洋学、医学、兵術などの新知識の導入に努めたほか、疫病・凶作対策や海防策など、藩政に多大な貢献をしました。さらに文章家として「士道要論」や「拙堂文話」により武士の倫理観、道徳や文章論は後世にも影響を与えました。

国民に政治不信が広がり、なかなか閉塞感から抜け出せない日本の現状を考えると、江戸時代藩校の人材育成教育を振り返ってみる必要があるのではないのでしょうか。

第八回齋藤拙堂顕彰 俳句・短歌

第八回齋藤拙堂顕彰会におきまして短歌俳句を募集しました処、俳句 八十二名、二百七十句そのうち高校生が四十二名四十二句、短歌は八十九名、百四十六首その内高校生が七十一名、七十六首の応募がありました。漢詩も一篇ありました。十二月の選考委員会の結果、次の作品俳句、十九名。短歌十九名が選ばれました。

表彰式は三月十七日津市中央公民館で、行われ詩吟朗詠会の皆様とその作品を吟詠して頂きました。



俳句の部

津市長賞

拙堂の見たる阿漕の浦の春

津市 奥山 功

選評

拙堂翁が佇んだとされる阿漕の浦は今
は穏やかな波が寄せ、松も昔と変わら
ず緑を湛えている。「春」の下五の断定
が力強く、句の呼吸が大きい。阿漕の
浦の語感も美しく格調が感じられる。
作者の拙堂を深く偲ぶ心が伝わる

津市議会議長賞

朝を割るパリッと子らの初氷

松阪市 瀬川 友子

選評

初氷と遊ぶ子ら。パリッととの擬音語に臨場感がある。その音そのものを「朝を割る音」と捉えたところが類をみない新鮮さでもある。

津市教育委員会教育長賞

虫の夜の机の上の大和綴やまととじ

津市 池田 容子

選評

大和綴は、和書などの本などを紐で結んで綴じられているもの。
古くからある日本の本の綴じ方でもある。その古い尊い一冊に作者は向きあっている。おのづからその著者にも思いを寄せ、夜の虫の声が作者をつつむ。静かな美しい日本の夜の光景。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

扁額に「有造」の文字凜と秋

津市 駒田 博之

選評

この句の良さは下五の措辞にある。「凜と秋」が力強い。歴史を貫いて今もある「有造」の扁額。それを見上げた作者は身の引き締まる思いであっただろう。

佳作

冬帽子つまみ会釈の小津映画

津市 種田 啓子

芭蕉葉の夕日の裂ける蜚小路

津市 成田 真喜子

戦火経て実を付け続く大銀杏

津市 湯浅 重好

初紅葉僧小走りの登り廊

津市 安部 修

薄氷をメダルのごとく掲げ持つ

津市 柘植 欽也

御正忌の名に負ふ饅頭家苞に

津市 中戸 悟

埋火や消してはならぬ御影堂

津市 野田 三枝子

産みたての温みを耳に寒卵

津市 富永 加代

寒禽の声のにぎはひ拙堂墓

津市 内田 寿子

拙堂の短歌緋く夜長かな

津市 白木 ひろ海

高校生の部

齋藤拙堂顕彰会

俳句 優秀賞

津の海を照らすオリオン夜半の冬

川 瀬 翔大（津高一年）

秋風にきれいにゆらぐ黄色の実

坂 本 脩 悟（津高一年）

秋晴るる青山にみる風車かな

森 田 桜子（津高一年）

津まつりで 夜空に光る 星たちよ

神 谷 星 頼（津高一年）

雨降れど賑わい絶えぬ津まつりや

龍 田 優 奈（津高一年）

短歌の部

三 芳 公子 選

津市長賞

いち早く津藩の聞く種痘所の

薬師くすしの動き痘瘡撲滅

松阪市 鹿 田 のぼる

選評

予防医学に注目した拙堂は種痘の術がわが国に入るやいち早く種痘所を開き藩内に種痘を進めた。ために痘瘡にか

かる藩民が少なかったという。痘瘡撲滅のために素早く動いた薬師たちをたたえた結句が力強い。

津市議会議長賞

津の秋を拾ひにゆかむ五感研ぎ

吟行すれば拙堂碑見つけぬ

津市 鏡 康 男

選評

拙堂墓碑は四天王寺に拙堂頌徳碑は津公園の中に建つ。秋色ふかまる津の町を吟行しておのずから拙堂の碑に出会ったのだろう。紅葉する木立の下に拙堂の偉業をしのび佇む作者の姿がうかぶ。

津市教育委員会教育長賞

戦墓碑に墓参する人今は絶え

花筒の中油膜光りぬ

津市 山 岸 芳 樹

選評

戦後七十八年にもなり戦争は遠い昔のようになってしまった。戦墓碑の花筒に花が絶え水を失った花筒には油膜が光る。忘れてはならない戦墓碑の前に人々の姿がない。下句に作者の嘆きがこもる。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

拙堂と旅するように吟ずれば

ことば言の葉みなあたたかし

津市 種 田 啓 子

選評

拙堂の漢詩を吟じているとあたかも拙堂と共に旅しているような気持ちになり詩句の言葉は温かく心にしみこんでゆく。下句に作者の感動がこもる。

佳作

藩公の城復元の気運あり

迫り出す松の月影清^{さや}か

津市 大 江 多 津 子

藩校の赤門くぐれば小判草

聞き入るがごと頭垂れをり

津市 岡 田 正 信

拙堂の紀行文読む我妻の

そばに寄り添い介護楽しむ

大津市 森 永 昌 雄

あるがまま生きよと説きし親鸞の

忌に供されし朝粥を食む

津市 齊 藤 宗 幸

伊勢参り道中の津を声高く

うたいて通る人あるたのし

津市 田 中 穂 波

高校生の部

優秀賞

津高校銀杏の実一本道

五感で感じる秋の訪れ

松 井 陽 菜 乃（津高一年）

ナノテクは小さいものから作られた

世界を支える大きな力

鈴木 武 蔵（津高一年）

有造塾江戸のときより受け継がれ

そして後世へ何年先も

田 中 創（津高一年）

知の結晶分子結晶見つけ出し

未来へつなぐまた一步

草 深 寛 明（津高一年）

未来へと私ができるサイエンス

追求し続け作ってゆくよ

原 田 蒼 衣（津高一年）

有造館未来を担う若人の

夢を育む出発点

廣 出 龍 平（津高一年）

津高校の銀杏の木の下君の影

揺れる葉っぱと私の心

安 達 櫻 子（津高一年）

古の偉人に学ぶ徳の道

背から見守る経ヶ峰

黒 澤 快 仁（津高一年）

ナノ粒子みたいな日々の積み上げで

津高の歴史は作られていく

野口 真央（津高一年）

有造塾人と人との繋がり

共有結合より強力だ

東 希美（津高一年）

「思慕」

土井 真次

寵恵今猶在

ちようけいまなおあ

雲煙接碧穹

うんえんへききゆう

泰平間坐久

たいへいかんざひさ

戦慄瞬時風

せんりつしゆんじ

鳥語人無識

ちようごひとしる

鰐魚櫓声中

かんぎよろせい

乞求騷客意

こいもと そうきやく

碩学拙堂翁

せきがくせつどうおう



第七回齋藤拙堂顕彰

小中学生書道展

心配していた新型コロナウイルスの感染もようやくやや下火になり、社会情勢も落ち着きを見せ、第七回展を開催することができました。応募数も六百三十一点を得て、何とか例年並みの作品を展示することが出来、会期中の鑑賞者も三百人を超え盛大な展覧会が開催出来たことは、拙堂会として望外の喜びでした。

鑑賞者の方から、「これだけ多くの作品を展示するのは大変なことでしょうが、応募者全員の作品を展示して頂けるのは子供たちにとっても今後の大きな励みになるのではないのでしょうか」との声を聞き有難く拝聴致しました。このことは今後も継続していきたいと思っています。

入賞されたほとんどの方には会場で賞状・副賞を渡し、ご都合のつかなかった方には、郵送等で賞状と副賞をお届けしました。入賞者の方は後記のとおりです。

尚、来年の第八回展は令和七年二月二十八日（金）から三月二日（日）の日程で開催することが内定しています。その時には又、多くの方の応募を期待しています。

最後になりましたが、今回の展覧会において、

拙堂会会員はもとより、役員・展覧会担当者、今年は出品団体の方々にも、展示準備、会場当番、搬出後片付け等にお手伝い頂き、格別の御協力をいただきましたことに心より御礼申し上げます。

齋藤拙堂顕彰小中学生書道展事務局 稲垣 武嗣



小学生の部

津市長賞

津市立戸木小学校 六年 山下 絢音様

津市議会議長賞

津市立北立誠小学校 六年 小川 愛莉様

津市教育委員会教育長賞

津市立南立誠小学校 三年 内山 いずみ様

中日新聞社賞

鈴鹿市玉垣小学校 一年 中村 胡実様

津市立西が丘小学校 二年 宮田 佳奈様

四日市市立常磐小学校 四年 森本 季依奈様

津市立成美小学校 五年 前田 芽生様

齋藤拙堂顕彰会会長賞

津市立南立誠小学校 一年 三藤 充喜様

津市立南立誠小学校 二年 坂井 想彩様

鈴鹿市立玉垣小学校 三年 近藤 結月様

松阪市立徳和小学校 四年 山口 妃優様

津市立新町小学校 五年 岩佐 悠伽様

特選

津市立成美小学校 五年 土性 茉尋様
津市立南立誠小学校 六年 今西 結菜様

津市立千里ヶ丘小学校 一年 谷口 乃愛様

三重大教育学部附属小学校 一年 本橋 ひまり様

鈴鹿市立玉垣小学校 一年 和佳奈 凜様

三重大教育学部附属小学校 二年 稲葉 理人様

鈴鹿市立栄小学校 二年 江川 結菜様

津市西が丘小学校 二年 川本 佳菜様

三重大教育学部附属小学校 二年 佐藤 佳子様

津市立立成小学校 二年 澤邊 凜様

津市西が丘小学校 二年 菅尾 育也様

津市立千里ヶ丘小学校 二年 杉野 栞夏様

津市立修成小学校 二年 村上 汐織様

津市立桃園小学校 三年 久保田 琥珀様

三重大教育学部附属小学校 三年 桑名 優宇様

三重大教育学部附属小学校 三年 永田 葵様

津市南立誠小学校 三年 中森 結海様

津市立南が丘小学校 三年 原 海佳様

三重大教育学部附属小学校 三年 山本 花様

津市立片田小学校 四年 市川 紗衣様

鈴鹿市立玉垣小学校 四年 岩元 彩芭様

津市立誠之小学校 四年 草深 実咲様

津市南立誠小学校 四年 中條 達貴様

津市立新町小学校 五年 石原 七海様

津市立西が丘小学校 五年 倉島 壽芽様

津市立桃園小学校 五年 須内 彩季乃様

津市立新町小学校 五年 中村 芽弥様

津市立新町小学校 五年 宮崎 真佳様

津市立片田小学校 六年 大門 拓斗様

津市立南が丘小学校 六年 中川 遙翔様

津市立北立誠小学校 六年 森本 華里那様

津市立北立誠小学校 六年 山崎 深月様

津市立新町小学校 六年 米澤 咲希様

鈴鹿市立庄野小学校 六年 渡邊 真央様



中学生の部

津市長賞

津市立久居東中学校 二年 平手 綾華様

津市議会議長賞

津市立西郊中学校 三年 河口 絢香様

津市教育委員会教育長賞

高田学苑中学校 二年 今西 陽香様

中日新聞社賞

津市立南が丘中学校 二年 矢古島 悠様
津市立西郊中学校 三年 市川ひなの様

齋藤拙堂顕彰会会長賞

津市立西郊中学校 一年 河口 綾真様
津市立朝陽中学校 一年 阪 佳歩様
津市立美里の丘学園中学校 一年 芝原 由珠様

特選

津市立朝陽中学校 一年 石谷 眞希様
津市立西郊中学校 一年 市川 湊介様



津市立西橋内中学校 一年 伊藤誠一郎様
三重大教育学部附属中学校 一年 海野 仁美様
津市立西郊中学校 一年 佐藤 心優様
三重大教育学部附属中学校 一年 高島由衣乃様
高田学苑中学校 二年 金田 小春様
松阪市立久保中学校 二年 中川 華恵様
津市立西橋内中学校 二年 朴木 琉遙様
津市立西郊中学校 二年 松本 実華様
鈴鹿市立天栄中学校 三年 市岡 陽菜様
鈴鹿市立千代崎中学校 三年 境 彩奈様
高田学苑中学校 三年 龍井美仁依様
津市立久居東中学校 三年 松岡 心海様

出展を終えて

縁書道教室 小島ゆかり

今年も私の習字教室から「齋藤拙堂書道展」に出展しました。津市の偉人である齋藤拙堂や地元の文化を知る貴重な機会となりました。

生徒たちはこの展示会に出展するために、冬休みも教室に通い、自分の納得いく作品ができるまで頑張りました。こちらの書道展は出展者全員の作品が展示していただけるので、教室から一年生と二年生は全員挑戦しました。初めての書道展におじいちゃんおばあちゃんも一緒に見る事ができたこと、保護者の方々にも喜んでいただけました。生徒たちは自分の精一杯の力を出した作品に、多くの方々から賞賛の言葉を受け、とても嬉しそうで自信がついたようでした。さらに、沢山の展示作品を見ることで、何か感じる事ができ、自分の書道の幅を広げるきっかけになったと思います。

このような展示会での活動は、生徒たちや私にとってとても貴重な経験となりました。教室では作品に取り組む際、「齋藤拙堂とはどんな人？」と必ず説明をしています。地元の偉人や文化に触れることで、彼らは学校の授業だけでなく、自分の書道や芸術活動をより深めることができたと感じています。今後も、このような機会を通じて、生徒たちの才能や創作意欲を引き出し、成長させていきたいと思っています。

展示会の関係者の皆様、ありがとうございました。

第八回齋藤拙堂顕彰 吟道大会開催

令和六年三月十七日（日）津センターパレス
二階、中央公民館ホールに於いて、第八回齋藤拙堂顕彰吟道大会が主催・津市吟剣詩舞道連盟・共催・津市、後援・齋藤拙堂顕彰会によって開催されました。

前葉泰幸津市長他来賓の方々のご出席を賜り、ご挨拶の後、俳句短歌の表彰が行われ、選者好評の後、受賞八作品が朗詠されました。

受賞者の方からは作品が朗詠で披露されたことに大変感激を受けて戴きました。

大会は加藤龍宗先生企画構成による「拙堂の和歌を詠う」と題した構成吟を始め、会員の吟詠・舞が演じられ盛会裏に終えることが出来ました。



俳句朗詠を終えて

第八回齋藤拙堂顕彰吟道大会において、俳句の入賞者の句を吟じるという貴重な機会を得て、短い期間で練習を重ねました。その体験は非常に感動的であり、心に深い印象を残しました。

今回の機会で俳句の魅力に触れることができ、短い句の中に、季節や自然、人間の心情などを巧みに詠う表現力に感嘆しました。また、句を吟じるにあたっては、陽調俳句のリズムや抑揚声の使い方など、細かなニュアンスにも気を配り当日に望みま

した。特に、伴奏の音の大きさにより音程が狂う場合があるため、種田宗家会長にお願いし、当日リハーサルにて前奏の音量調整を念入りに行いました。

いざ本番、最初は音程が狂わないか、緊張と



真山流吟詠会 一石野 真風

興奮で胸が高鳴りましたが、伴奏音が良く聞こえ、スムーズに声が出てきたので、ほっとした感じで心が落ち着き、作者の気持ちになって吟じることができてよかったです。句を吟じることで、受賞者の背景や想いに触れ、その繊細な感性や生活の一場面を体験し、言葉の持つ力を再確認しました。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった種田宗家会長始め先生方に心から感謝し、今後も詩吟を通じて俳句の世界に触れ、表現力を磨いていきたいと思えます。



書道の部

書道展で（第七回書道展）入賞されました、
小学生、中学生の喜びの声

小学生の部

津市長賞

山下 絢音（六年生）

私は、先生に教えてもらった全体のバランスと
中心について意識して練習に励みました。賞を
いただけて嬉しいです。これからも努力します。

津市議会議長賞

小川 愛莉（六年生）

一年間一生懸命練習した成果がでて、とても
嬉しかったです。来年は一画一画にもっと集中
して取り組み、もう一つ上の賞を取りたいです。

拙堂顕彰会受賞の喜び

中学生の部

津市教育長賞

今西 陽香（二年生）

日頃の努力の成果が、私を受賞へと導いたの
だと思っています。これからも書道と向き合い、日々
精進していきたいと思っています。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

柴原 由珠（二年生）

私は小さいころから習字を習っていました。
なので、入賞したことを聞いた時は、とてもう
れしく思いました。これからも頑張ります。

俳句の部

津市長賞

受賞のお礼のことば

奥山 功

私は、昭和二十九年三重県に奉職平成八年に
退官しました。

老後の趣味のひとつに俳句を志し、県職員
OBの俳句会、また、地元との交流を深めたく
南郊公民館教養講座俳句会（南寿）に入会し現
在に至っています。

第八回齋藤拙堂顕彰吟道大会へ投稿し栄えあ
る津市長賞を賜り嬉しい限りです。

受賞された方々の俳句を愛する心と健康をお
祈りいたします。また、吟道会のますますの発
展を念じています。

ありがとうございました。

津市議会議長賞

津市議会議長賞を受賞して

瀬川 友子

陽春の午後、拙堂顕彰吟道大会、俳句の部、
山崎満世先生の選で議会議長賞を受賞し、また、
児玉龍笙様の吟詠を拝聴し誠に有り難く感激致
しました。

短い俳句をどのように吟詠されるのか、興味
津々でしたがさすが、その道を極めておられる
方々の吟詠に納得させていただきました。また、
短歌は尺八の音色も心地良く情感たっぷり心に
沁み入りました。

市長賞の四年前はコロナ禍で中止になり、吟
詠を楽しみにしていたのに残念でしたので、今
回こうして晴れの部舞台上がれたことを大変
嬉しく思います。

短歌の部

津市議会議長賞

津市議会議長賞を受賞して

鏡 康 男

この度は津市議会議長賞を頂戴し誠に光栄に思っています。また、受賞に際して、吟道大会の場で表彰と共に、受賞作を朗詠していただき感激に耐えません。

朗詠があることはあらかじめ聞いておりましたが、いざ私の受賞作が吟じられた時には、自分の作品かと聞き違える程でした。このような栄誉を賜ったことに津市吟剣詩舞道連盟の皆さまにも深く感謝申し上げます。

顕彰短歌への応募は今回が二回目です。それ故、拙堂先生について詳しく知りたいと思い「齋藤拙堂顕彰会会報」を拝見し、改めて先生の遺業に感銘を受けたところです。また、実際の先生の遺跡に触れたいと思い、吟行を兼ねて津偕楽公園を訪ねたとき、立派な顕彰碑を発見しました。その碑を見上げ、碑文を眼で追いながら先生の遺徳を偲びました。その時の感動を歌にしたところ

最後になりましたが、山崎先生、児玉様、お世話下さった関係者の方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回、選んでいただき喜びもひとしおです。

今後とも顕彰短歌への応募を通じ、先生を偲び、齋藤拙堂顕彰会の取り組みに少しでも参加できればと思っています。また、本会の皆さまのようになり、出来れば自分の言葉で先生を語れるようになりたいと思っています。

最後に齋藤拙堂会のますますのご発展と、会員皆さまのご活躍を心からお祈りし御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

津市教育長賞

「合 掌」

山 岸 芳 樹

私は、昭和二年生まれですが、昔住んでいた仏間には、軍服姿の叔父の遺影も祖父母の写真と一緒に掛けられていました。

昭和三十三年十二月に、共同墓地の真ん中に「南無阿弥陀仏」と刻まれた石塔の両脇に、三基ずつ六基の戦没者の墓が建立されました。

しかし、六十五年余り経過した現在、六基の内すでに四基は、無念仏状態にあります。なぜかと言えば、出征された多くの方が、次男や三男で妻子を持たず、その親・兄弟もすでに故人となっているためです。

私は、昨年の秋の彼岸前に墓参に行った際大きな花筒の中を覗き込んだとき、花筒の底には雨水が溜まり、表面には油膜が張り太陽の光を受

けて、にぶく光っていました。そして、戦後よく聞いた「泥水すすり、草を噛む…」の歌詞が思い浮かびました。叔父を始め、異国の地で亡くなられた方々の犠牲の上に、今日の平和な生活があることを深く考えた次第です。私は、持参してきた生花を七等分にし、花筒に挿し入れ『重聖偈』を唱えて頭を垂れ感謝の意を尽くしました。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

齋藤拙堂顕彰会会長賞を受賞して

種 田 啓 子

この度は思いもかけず栄えある賞をいただきありがとうございました。

先般齋藤拙堂の短歌について、大辻隆弘先生の講義を受け、言葉のひとつひとつにむかしさを感じました。しかし今まで読まれ続けられてきたものには、心根のやさしさがあふれる何かほっとさせられるものが多いと気がつきました。これからも文字遊びを楽しみたいと思います。

葛山さんに清々しく吟じていただき良き日となりました。



伊東祐相について

寺島 栄一

齋藤拙堂の「海外異傳」は嘉永三年に拙堂によって書かれたものだが、これは海外事情に目を向けた作品である。その題詞に七言絶句があり、日向の飢肥藩主、伊東祐相の作である。

盛世無由試錯盤 盛世 由無く 錯盤を試みるに
遠懷利器去求餐 遠く利器を懷きて去りて餐を求む
峨冠重見同舟客 峨冠 重見す 同舟の客
非復當時袴下韓 復た当時袴下の韓に非ず

この詩は山田長政が乗船を断られて密航した時頭をさげたことと、韓信の股ぐり故事に例えたもので、大きな目的を達成するためには恥辱を我慢するということである。その後の長政は出世してシャム（現在のタイ）に日本人街を作ったことで知られる。韓信の股ぐりは現在でもよく引用されているが伊東祐相は漢詩を知の巨人といわれた安井息軒に学んだ。拙堂との接点は非常に關心があるが、拙堂の学問を通じた人脈の深さを感じた。

参考文献 直井 文子 日本漢文学の江戸後期 ―知識人の自己表現― 汲古書院

令和六年度拙堂会総会報告

令和六年五月十二日（日）アスト津・橋北公民館研修室Bにおいて、第八回総会が開催され、各議題が満場一致で可決されました。以下、これを要約して報告します。

令和五年度事業報告

・拙堂會報 第十四号令和五年六月一日
第十五号令和五年十二月一日発行
・齋藤拙堂顕彰出張講座は学校の都合がつかず実施できませんでした。
小学生むけのビデオ「齋藤さんでどんな人!?」

（出演者 齋藤正和顧問、制作 津市教育委員会）が作成されました。

・拙堂塾の開催（講師 齋藤正和）

場所 橋北公民館会議室

令和五年度第一回目講座 六月十日（講師 齋藤正和顧問）「拙堂の遺著解題―学問芸術」・第二回目講座 八月二十六日（講師 齋藤正和顧問）「齋藤拙堂の文学と芸術について」・第三回目講座 九月二十三日（講師 大辻隆弘氏（宮中歌会選者））「齋藤拙堂と和歌について」・第四回目講座 十一月十八日（講師 中村光司氏（津市教育委員会生涯学習課文化財担当主幹））「津市の文化人と史跡」

・野外講座の実施について

養老大垣バス旅行（令和五年四月十六日）参加者三十五名養老千歳楼（昼食）、奥の細道むすびの地記念館、梁川星巖記念館見学などを令和五年十月一日～十一月三十日に実施（本紙4～7頁をご参照ください。）

応募作品：俳句 八十二名 二百七十句

短歌 八十九名 百四十六首

表彰者 三十八名

・齋藤拙堂顕彰会「第七回小中学生書道展」

作品募集十二月一日～一月十五日（本紙7～9頁をご参照ください。）

作品展示会（六百三十一名）は令和六年三月八日から十日・表彰式は令和六年三月十日に

実施（表彰者六十二点）

・齋藤拙堂顕彰第八回吟道大会と俳句・短歌の表彰式は、令和六年三月十七日津中央公民館で開催され、俳句・短歌の入賞作品が吟詠した。（本紙10頁をご参照ください）

・インターネット

「齋藤拙堂顕彰会ホームページ」を更新した。

・齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業は齋藤正和顧問中心に活動した。

・「郷土歴史博物館」の建設推進活動設立」活動

・会員増強については、事業の拡大・新規事業の取組等必要な資金調達を目的に会員の増強に取り組み、期末には団体四十社（十二社増加）個人百八十四人となった。

令和五年度決算報告及び監査報告

決算報告

収入合計	一、八四三、六五九円
支出合計	一、一四〇、八三六円
事業費	一、〇一四、五〇三円
運営費	一二六、三三三円
繰越金	七〇二、八三三円

監査報告

会計は適正に処理されている。

監事 國分昭男・米田堯光

令和六年度事業計画

・拙堂會報発行 令和六年六月一日第十六号

令和六年十二月一日第十七号

・齋藤拙堂顕彰出張講座の実施

・拙堂塾の開催 場所：橋北公民館会議室

第一回 令和六年八月十六日

講師 椋本千江氏

「藤堂高虎のしつけ」

第二回 令和六年七月二十一日

講師 齋藤正和顧問

「拙堂の漢詩と和歌」

第三回 令和六年八月二十五日

講師 中村光司氏

「津市の文化人と史跡」

十月・十一月・十二月・一月開催予定で内容未定

・拙堂塾野外講座「京都バス旅行」（令和六年九月二十日）募集人員四十名

頼山陽の山紫水明処、相国寺、（昼食）・南禅寺見学

・齋藤拙堂顕彰会「第九回俳句・短歌」の募集

令和六年十月一日～十一月三十日

・齋藤拙堂顕彰会「第八回小中学生書道展」作品募集

令和六年十二月二日～令和七年一月十日

書道展

令和七年二月二十八日～三月二日 リージョンプラザ

・齋藤拙堂顕彰第九回吟道大会と俳句・短歌表彰式

令和七年三月十六日

場所 中央公民館ホール

・インターネット

「齋藤拙堂顕彰会ホームページ」の更新

・齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業

齋藤正和顧問を中心に活動する。

・津市に郷土歴史博物館の建設推進活動

飯田理事長を中心に活動する。

令和六年度予算

収入合計	二、三四八、八三三円
支出合計	一、七七五、〇〇〇円
事業費	一、五六〇、〇〇〇円
運営費	二一五、〇〇〇円
繰越金	五七三、八三三円

会員の増強に関する件

事業の拡大・新規事業の取組などに必要な安定した資金の調達を目的に、会員の増強に取り組みます。目標 団体総数四十五先五十口、個人総数二百人二百五十三口）

理事の選任について

荒木康行理事の退任により後任者海住禎人氏を選任した。海住禎人氏は(株)百五総合研究所代表取締役社長の要職にあります。